「単語以上文以下」のもつ重み

高橋 潔

1

きわめて普通で、当然なことと思われてきたが、立ち入って考えてみると、実はどうやら疑問に思える英語の学習方法がある。

単語帳で、片っ端から単語を覚え、さらに文法書を丁寧に読み込んで文法規則を頭に叩き込み、その規則に従って単語を並べ文章を作り上げ、書いたり、言ったりするのが正しい英語(外国語)の学び方だという日本の英語学習の神話のことである。

実は、筆者もこの神話に取り憑かれ、高校時代に当時大人気であった「赤尾の豆単」こと『英語基本単語集』(旺文社)を数百歩ごとに1単語を頭に叩き込むと決意を固め、ムニャムニャと英語の発音らしく努力してつぶやき、赤鉛筆を舐めながら全ページを10回あまり繰り返し、さらに同じ著者の『英語の総合的研究』(旺文社)で文法を叩き込むべく数回にわたって読み返した。そのボロボロになった、貴重にして凄惨な遺物は、今も物置の本箱の片隅でほこりをかぶってホコらしげに(時には恨めしげに)残っている。振り返ると、我ながら、若さと無知に任せてひどく頑張った時期があったのである。

永きにわたって、当然視されてきた「まず単語を覚え、学習した文法規則に従って、英文を作り上げる」という作業は、高度な語彙記憶力をもつコンピュータで無限ともいえる文章作成プログラムを作動させられるなら、理論的には(そして実際にも)可能であろうし、最近の文章生成プログラムがすでにそれに似た能力を示している。しかし、どうやら、そもそもこのやり方は生身の「普通人」にはできないのである。あるいは、非人間的と言ってもいい。下手をすると、性格と人格にまで望ましからぬ影響を与えかねない!

そうはいうものの、こうした伝統的なやり方でやり抜き、英語の「達人」の高みにまで達した者が、どうやらいなくもないから、世の中単純ではない。

筆者はとてもそこまでは到達できず、自分の非力を悟り、密かにうなだれるしかないレベルにあるが、悔しさ半分で、ここでは「普通」の日本人が、性格や人格にまで及ぶ悪影響に苦しむ(?)ことなく、「普通」程度に英語が使えるようになるにはどうしたらいいかを考えてみようというわけである。いわば、近ごろ流行りの「終活」の1つとして、少し整理し書き残すこととした。

案がなくもないようである。

2

1. Look at the *tall two* boys over there.
2. She bought a *new beautiful* dress at the market.
3. They found an *old superb* house in the country.

このような発話に、直感的に「?」と違和感をもつかどうかは、英語力をしっかり身につけているか否かで分かれると思われるが、英語を母語とする人なら 1. *two tall* 2. *beautiful new* 3. *superb old* のような語順を、いわば自然に生成するはずである。^{注1} こうした語の組み合わせ(lexical collocation)は、文法規則を適用して、頭の中でその都度、その場で形成されていると考えるにはかなり無理がある。むしろ我々の言語生活では、文章・発話が部分的には「あらかじめ出来上がっている語の集まり」=「広い意味での連語」を再利用して行われていると捉えるほうが、種々の事例に照らすと、より合理的と思われる。バラバラの単語が(アルファベット順に整然と)頭の中に蓄積されていて、それに文法規則を適用することによって、われわれは文章・発話を形成している、と考えるのではなく(そのように考えることは可能な代替手段ではあるが)、1度に2語～5語程度からなる語句(cluster)を組み合わせている、とするほうがより合理性があるということである。^{注2}

筆者はかつて日本の検定教科書『英語 I, II』の 49 種類 98 冊をすべて電子化して、*collocation*, *cluster* と見なしうる、出現頻度のある表現 300 個あまりを抽出したことがある。Have a nice day, so to speak のようないわゆる熟語・固定表現から、late at *night*, the *night* before, the *night* sky; a few *days*, in those *days*, few *days* later; a *kind* of, what *kind* of ...?, this *kind* of; in this *way*, by the *way*, all the *way*, the best *way* ... といった、かなりの頻度で現れる結びつきの緊密な「連語」を含むものとなった。(慶應義塾大学 日吉紀要 英語英文学 No. 37 2000)

文部科学省(以下、文科省)は従来から学習指導要領(同解説)で「連語」なる用語を用いているが、*collocation*, *cluster*, *idiom*, *set phrase*, *fixed expression* のどれをも意味し、かつどれとも限定しない、考えようによっては、巧みな日本語である。『広辞苑』は「(1)二つ以上の単語が結合し、それぞれの単語よりも複雑な一まとまりの概念を表す語。「梅の花」「間に合う」の類い。(2)二つ以上の単語が本来の意味を保持しながら慣用的に並列されて用いられる表現。「茶を入れる」「計画を立てる」など。」としているが、まさにこの「連語」が英語学習の面で、現状よりもっと重要視されなければならないと思われる。

文科省が小学校学習指導要領で例示している連語・慣用表現は *in front of*, *a lot of*, *get up*, *look for*; *excuse me*, *I see*, *I'm sorry*, *thank you*, *you're welcome*, *for example* であるが、これらが出現頻度の高い、まとまりの強い語群であることに読者も異存はないだろう。一方、筆者の考える「仲のよい語のかたまり」はこれほど慣用的に緊密ではないもっと緩やかな結びつきをも含む語の集まりである。

3

大学の入学試験では、いくつかの教科を受験科目に選定して出題するのが普通であるが(もっとも最近では、学科試験を行わないで、あるいはそれと合わせて面接や経歴などで選抜する大学もあるが)、学力試験を行う場合には、英語の学力を問わない学部・大学は多くはないと思われる。個別の学部で行う独自の試験から、共通の全国的あるいは国際的な機関が作成する外部試験に至るまで、実施の形式・

種別は実にさまざまではあるが、基本的には英語は試験科目に含まれている。そこには英語力が将来的に必要なことは明かだとの認識が背景としてある。数学を文系の学部で課す学部・大学がマスコミで話題になったことがあるが、理系学部の試験科目から英語を外すという大学はあまり耳にしない。各大学とも、とにかく英語力を試そうとしている(英語力に優れた受験生が、そうでない受験生よりも入学後により優れた成績を上げるという十分納得のゆく追跡、検証、実証的証明はなされてはいないようだが)。

文科省は 2023 年 7 月 31 日、2023 年度全国学力・学習状況調査(全国学力テスト)の結果を公表した。英語は中学校で 4 年ぶり 2 回目の調査となり、「聞くこと」・「読むこと」・「書くこと」の合計を集計した平均正答率は 46.1% となった。前回 2019 年度の 56.5% と比較すると、10.4 ポイント低下していることがわかる。4 技能別には、「聞くこと」58.9%、「読むこと」51.7%、「書くこと」24.1%、「話すこと」は 12.4% となっている。国立教育政策研究所の報告書では、日常的な話題について、正確に読み取ったり、目的に応じて英語を聞き取ることはできているが、社会的な話題に関して、考えを書いたり、話したりすることには課題がある、と書かれている。文科省の会見では、「全般的に設問設定等が複雑になり、生徒にとっては難しかったと思われるが、「書く力」と「話す力」に課題がみられた結果を重要に受け止め、取り組みを強化したい」と述べていた。

2019 年度の調査では、「聞くこと」68.3%、「読むこと」56.2%、「書くこと」46.4%、「話すこと」30.8% であったから、書くことと話すこと(表現力)で特に点数が低く出たことになる。文科省は設問の難しさを認めつつ、英語の学習指導の改善・充実のために取り組みを強化したい、と述べている。

確かに、かなりショッキングな内容ではある。しかも、今までの 2 回のテストとも、表現力(書く・話す)の点数が理解力(読む、聞く)の点数をかなり下回っている。設問を変えても、この傾向は変わらないと思われる。いや、むしろ読む力より聞く力のほうが優れているというのは、心強くもある。筆者が 20 年ほどずつ携わった、いわゆる受験競争最上位(東京外国語大学英米科・慶應大学医学部)の学生たちの成績記憶からすると、読み書きの力はある程

度あるが、聞く・話す力は最近の流行語らしい言い回しを借りるなら、「無理、ムリ、ムリ」という一般的な反応だったからである。筆者の経験では、かつての学生たちは聞くことより読むことが得意な学生が多かった。そして絶対レベルは個人差があるにせよ、話すことより書くことにより優れていた。

ついでながら、筆者は表現能力の面では、書いて表現するほうが話すことよりも、優先権をもつと考えている。実務現場でも重要な事項は書いて文書なり電子媒体でやりとりされることのほうが多いのではなかろうか。そもそも正規の契約では、口頭では法的効力をもたない。日本の企業や団体で、英語で会議をし、大学の講義でさえも(日本文学や国内法関連まで含めて)カタコトの英語で行う必要がどれほどあるのか、筆者には理解も賛同もできない。そして、それを目指して、中・高の英語授業は基本的には英語ですべし、という風潮や規則にはいまだに素直には同調できないでいる。

4

世の中には、大学の教師が受験生向けの参考書に手を出すのは邪道であり「研究者倫理にもとる」とする意見もある。全否定はもちろんできないが、筆者はその立場に与しない。日本の若者が、最も英語の習得に熱心に取り組む時期は一般的に中学校・高等学校時代で、その直接的理由は「受験を勝ち抜く」という差し迫ったものである。その時期に、望ましからぬ方法で、英語の習得に励むと、「大理石にひとたび間違ったノミを入れると、あとでどんなに苦勞しても、まともな作品にはできない」ということになってしまう。授業・講義、校務に加えて、限られた範囲の同業者ばかりが目を通すような「論文」を大学の紀要などに発表するのが、大学教師の学術的任務である、とする状況には反省と議論の余地があり、もっと広い社会的視野から十分な検討が必要だろう。対象を学習参考書に限定するなら、積極的に実験的な学習参考書が出され、「売れ行き」という社会的審査を受けることが「邪道」とはいえないと考えている。参考書に限らず、再版を重ねる著作物は、それなりの支持を受ける内実・根拠を備えているのである。優れた英語学習書は、大学の紀要論文を超える社会的貢献があるとする考えが不当とはいえないだろう。

筆者の関係する『チャート式シリーズ GRAND EARTH 基礎からの新々総合英語 新訂版』(数研出版)(以下、『基礎からの新々総合英語 新訂版』)では、骨格となる重要な文法項目を理解するための典型的な短い例文 570 あまりを精選して載せている。この暗唱・暗記するにふさわしい英文を、英語のネイティブスピーカーに吹き込みをお願いした。典型的な、文法理解に欠かせない、比較的短い表現には同時に、典型的な「連語」=「単語のかたまり」が含まれている。この短い英文を、何度でもスマートフォンなどの電子機器で繰り返して聞き、できれば口に出して真似をすることで記憶に留め、さらに連音・弱音となって起こる英語音の変化にも馴染んでもらうことで、「英語耳」と「英語口」を作り上げていく、というのが文法的解説・説明の背後に込められた狙いである。繰り返すことで、その都度理屈で単語を結合させるのではなく、つながりをひとまとめで、脳中に収めてしまおうというのである。

5

「館内飲食禁止」の英語表示が“*No drinks and foods in the hall*”となっているのを見かけた。日英併記であった。意味はわかる。*Oxford Advanced Learner's Dictionary* には、*Passengers are left without food and drink four hours.* の用例文を含む *food(s) and drink(s)* が 14 回、*food and soft drinks* が 5 回見られるが、*drink and food* の語順は 1 回も見当たらない。この優れた学習者向けの辞書が対象としていると思われる「世界の学習者」向けの英語ではないとの認定からであろう。一方『ジーニアス英和辞典』(大修館)には日本人向けに、*food and drink* に「通例この語順」と注意書きがつけてある。この現象について説明が一番親切なのは『新英和大辞典』(研究社)で【日英比較】として短い説明を入れている。英米系の大型辞典では、解説はおろか用例すらないという冷たい扱いであり、中型辞典でも同傾向で、使用についての注記はない。同じように、学習者向けの辞書とされる *Longman Dictionary of Contemporary English* では、*good food; hot / cold / spicy / fatty / starchy food* から始まって、連語用例が列挙されて一覧形式で相当数取り入れられてはいるが、*food and drink* といったレベルまでは踏み込んではいない。*Macmillan*

English Dictionary for Advanced Learners of American English においても同様である。編集方針の違いであろう。

しかし、「英単語を1つずつバラバラに頭に叩き込む、そして文法規則によって並べ替えて作文・発話に及ぶ」とするやり方で不都合が起こるのがこうした場合である。「飲食(物)」の並び方とするのが日本語の慣例であり、「食飲(物)」などと勝手に変えることは許されない。同じように英語では、*drink and food* の配列・用例は Google 社のデータベースではゼロではないにしても、原則的にこの語順にはならない。数学と違って、必ずしも $a+b = b+a$ とはならないのが言葉の世界であり、バラバラにできない密着したまとまりなのである。先に2節の冒頭で示した3つの例文も、この仲間である。切り離してバラバラにはいけない表現が英語には多くあるのである。

単語の説明で困る代表格が前置詞と冠詞で、「先生、*the* と *a* はどう使い分けるのですか」「*in* と *at* はどう違うのですか」から始まって、“*How shall we spend our holiday?—I’d rather stay home than go to a crowded place.*” (『基礎からの新々総合英語 新訂版』 p.113) では、「なぜ *home* の前に *at* がいないのですか」などと、英語を学び始めて数年という若造連が攻め立ててくる。わからないなどと口にするのは先生の活券に関わるとばかり、英文法から英・米語法の知識を中途半端にひけらかすと、とんでもない冷や汗ものとなる。

それもこれも、こうした厄介の源は、やはり単語をバラバラに教えたり学んだりする方法に行き着くことになるだろう。

6

先日、久しぶりに書店の英語コーナーに立ち寄り、その単語学習本の多さに、いまさらながら驚いた。小学生から始まって、中学・高校から社会人向けまで、ズラーと揃えられている。多彩な装いで、どれも手元におけばたちまち英単語をマスターできる、という雰囲気を漂わせている。選択に困るほどであった。単語学習本の執筆経験のある身として、これでは、筆者ごときには勝ち目はないな、と元気をなくした。「悪貨は良貨を駆逐する」とは、中世ヨーロッパに限らない名言だ、と勝手に自分の著作物を

思いやってトボトボと帰路についたのであった。

「我々の脳中に収められている語彙の多くは決まって一緒に用いられる単語の組み合わせから成り立っている。そうした組み合わせで用いられる一方が起こると、もう片方の語句が起こることを予想できる。」(筆者翻訳)とされている。^{注3}

この見方が妥当だとすると(そう考えるのが最も相応しいと筆者には思われるが)、英語の単語の習得は相応しい文脈の中で行うべきだ、となる。つまり、「連語的学習」が最も合理的である。ここで、はなはだ厄介なのは、そのような原理に基づく書物が筆者の知る限りでは、いまだ市場に出ていないと思われることである。筆者にはその作業を引き受ける時間がもう残されていない。現時点では、自分が関係した先の『基礎からの新々総合英語 新訂版』の基本例文 572 や「重要語句索引」に収められた連語を手がかりにしたりして、句例・文例などを中心とした学習・習得をおすすめするしかない。

結局のところ、「終活」の当面の締めくくりは、連語的単語の習得と、できるだけ多様な地域を含む代表的な発音に触れ、かつ馴染む学習方法を勧めることである。普通の人が、「達人」に近づく方法の最も妥当なものと考えているが、いかがであろうか。

注1 David Crystal *The Cambridge Encyclopedia of the English Language* p.223 Cambridge University Press 1995

注2 A. Renouf and J. M. Sinclair 'Collocation frameworks in English' p.143 in Karin Aijmer and Bengt Altenberg *English Corpus Linguistics Studies in Honour of Jan Svartvik* Longman 1991

注3 Gorean Kjellmer 'A mint of phrases' p.112 in Karin Aijmer and Bengt Altenberg *English Corpus Linguistics Studies in Honour of Jan Svartvik* Longman 1991

(慶應義塾大学名誉教授)